

四時七分のバスに乗ろうと、道を歩いていたら、
 電車道に出たとたん、後ろから、
 誰かが、肩をたたいて、僕を呼ぶ。

振り向くと、高校二年ぐらいの先輩二人。

「今、見たやろ、あいつや。」

学校の方へ歩いて行くあいつや。

今、お前と、そこで、すりおうた奴や。

あいつ、たかりや、百円取られた。」

と、気が抜けた、元氣のない調子で、僕に言う。

たかりだ。

僕は無視されたか、助かった？

「たかられる程の金持ちには、どうも僕は見えんのか。」
 と、その時、内心思った。

「ほな、あかんや、すぐ、先生に届けなあ。

この自転車貸してやあ、俺やったら、わからへんし、
 俺、先生呼んでくるわ、それまで、見張っててえ。」

と言って、僕は、先輩の一人が、乗っていた自転車を
 借りて、学校の方へ走った。

学校の方向に、のらりくるりと、歩いている
 その男のそばを、僕は知らん顔して走った。

今度は、中学二年の子が、たかられかかっていた。
 しかし、僕は、知らん顔して、学校へ急いだ。